

---

# ブルー・アイリス

青龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブルー・アイリス

### 【Nコード】

N8750Y

### 【作者名】

青龍

### 【あらすじ】

俺こと達哉は、科学と魔法が発達した壁に覆われた世界でぬるま湯のような平和に浸っていた。だからだろうあんなゲームに手を出したのは…。

現実とゲームの壁は混ざりあいやがて逆転していく。

こんな俺にも何か出来ることはあるのだろうか。

## 解説1（前書き）

中学時代に書いてたやつを見るとひどいもんですね。  
ちよつと手を加えるだけのつもりがかなり変わってしまった。  
面白くなるようこれからもバンバン書き直します！  
見てって下さいね？

## 解説1

ブルー・アイリス ワード

如月 達哉 (15才) 男

171cm 48kg

過去の事故の影響で右目に魔術具を持つ。グループの突っ込み担当。

氷の刀使いで能力を使っている時だけ右目が青くなる。

毒舌だが人には好かれる。使用魔術具

氷不死鳥の核

氷凰

新島 椿 (16才) 男

169cm 56kg

達哉の親友。グループの突っ込み担当。

エレベーター式のマジックスクールに小2の時に転入してきた。

達哉と対をなすDSである。紅蓮の瞳を持つ火の双剣使い。

使用魔術具

火龍の双牙

龍の腕紐

有馬 悠 (16才) 男

174cm 61kg

頭が良く、作戦立案者。グループの盛り上げ担当で、人気者。元ボクシング部所属の地の手甲使い。

使用魔術具

巨人の腕

泥作りの首飾り

坂神 文弥 (16才) 男

163cm 43kg

グループの盛り上げ担当。医者の息子のだが、その生まれを嫌っている。

風の鞭使い。

使用魔術具

天馬の尾

天馬の翼

平山 隼斗 (16才) 男

165cm 52kg

ビビりで、後衛専門のぼっちゃり。

グループのいじられ担当。オタクに向かってまっしぐらな、無使い。

使用魔術具

無の象徴

逃げの足輪

安藤 美紀 (16才) 女

167cm 42kg

男っぽい性格。

グループのまとめ担当で男子は逃げぎみだがわりと美人。

ぬいぐるみを集めるのが趣味という乙女チックな一面もある。

雷の護符使い。

使用魔術具

雷の紙束

信号首輪

早崎 鏡花 (15才) 女

161cm 40kg

達哉の右目の秘密を家族以外で唯一知っている人物。グループの癒し担当。

達哉の幼なじみでのほほんとしているためいつも達哉にいじられている。

水の杖使い。

使用魔術具

水柱の杖

結ぶ指輪

如月 瑠美（14才） 女

152cm 38kg

多少ブラコン入った、達哉の妹。

マジックスクールの中等部に在籍している。

来年高等部に入学してくる光使い。

使用魔術具

天使の翼

エンジェル・リング

## 解説

達哉たちの通う学校

大日本マジックスクール

生徒数5000人以上の小中高一貫校。

達哉たち7人は高等部の1年、瑠美は中等部の3年。

## 魔術具

モンスターが死んだ後、残された素材を使って作ったアイテムのこと。

武器として使うウェポン系と、一般家庭で使うためのローカル系が

ある。

#### 属性

火、水、雷、風、地、木、光、闇、無があり、派生してさらに多くなる。

基本は一人一種類持つ。

この世界は科学と魔法、相入れないはずの二つが混合している。

町の外にはたくさんのモンスター達が徘徊しているため常に危険地帯と化している。科学と魔法の力で守られている主人公達はある最先端オンラインゲームを見つけ興味本意で始めてしまう…。

ゲームの世界は4つの界で出来ており、人が住む現界（火、木）、その下の下界（闇、地）、現界の上にある空界（風、雷）、一番上にある天界（光、水）がある。

属性、アバター、町や町の外のグラフィックはほぼ完全に現実世界と同じに出来ている。

## 解説1（後書き）

今回はワードだけです。

次回から本編です。

あからさまな敵役や、声だけのうざーい女の子も出ますが見てって下さいね？



## 現実・上（前書き）

2115年

科学と魔法が発達した世界。

始まりは夏の統一祭。

ここから物語が始まる。

## 現実・上

### 保健室

部屋の外から響く喧騒と雄叫びで目が覚める。

俺こと如月達哉は保健室のベッドから身を起こすとぐっ、と伸びをした。特に体調が悪いわけではなくただのサボりだ。

「達哉」

カーテンの向こうから聞いたとたんに眠くなるような間延びした声の主がトコトコと歩いてきた。

「鏡花か？」

「そうだよ」

カーテンの隙間から少し幼い少女の顔がひょっこりと現れる。

このポワンとした少女は、俺の幼なじみの早崎鏡花。どちらかと言うと遅崎だと思うのだがそれは胸の内にしまっている。

「もうすぐ決勝戦が始まるよ」。

早く起きないとみちゃんたちにおいて行かれるよ」

みちゃんたち、とは拓哉や鏡花が普段一緒にいるグループの一人だ。

新島椿、有馬悠、坂神文弥、安藤美紀、平山隼斗の5人、全員で7人だ。小学生の頃から大体このメンバーで一緒にいることが多く、互いのことを下手をすれば親よりも理解している。

「達哉が来ないと私がみちゃんに怒られるんだよ」

鏡花が情けない顔で腕を引っ張ってきた。

鏡花は昔から達哉以外の友人には「みちゃん」を付ける癖がある。

「ハイハイ、わかったよ」しぶしぶベッドから出て、歩き出す。

「あつ、待つてよ」

鏡花がトコトコと一生懸命についてくる。なんと言えばいいか鏡花は（外見以外は）高校生より小学生に近い。中身が成長していない

だけかも知れないが…。

結局、鏡花の速度にあわせて横を歩く。

横目で鏡花を見るとこちらを見ながらニコニコしていた。

## 移動

「ようやく来たか。サボリ魔め」

「ずいぶんなごあいさつだな、美紀」

「ふんっ」

と、そっぽを向いてしまふみちゃんこと安藤美紀。

「まあまあ。とりあえず不戦敗にならなかっただけいいじゃん。ねっ?」

明らかにご機嫌伺いをしているのが分かるビビリ隼斗の言い回しに美紀はさらに怒りだす。

5人は安全地帯まで避難してから、決勝戦の作戦を立てる。もちろん、たびたび聞こえてくる悲鳴はスル！。

「今回は誰が前衛に行く?」

達哉が椿に話かけると

「…俺が行く」

と、殺気のこもった声で悠が言った。

「…何があつた?」

向かいにいる椿に聞くと、

「それが…」

## 30分前

椿、悠、隼斗が会場に向かって廊下を歩いていると、

「またお前らかよ」

少し長めの髪をかき上げながら歩いてくる影があつた。

「…ん?」「」

三人一斉に同じ反応をする。

向かいに立っていたのは今回の相手、流生率いるグループだった。

「こっちのセリフだ」

椿が鬱陶しそうに答える。

流生のグループは毎回トーナメントに出て、毎回達哉たちに負けているグループだ。

「けっ、いつもいつも邪魔なんだよー!」

「んだとトカゲ顔!」

「なっ!言つてはならないことを…」

椿のトラウマ級の発言に流生が怯む。

「そ、それより。毎回トーナメントに出て毎回俺たちが負けるなんてな。どんなイカサマ使っているのか知りたいもんだ」

この流生の言葉に、

プチンっ

と、何かが切れる音がした。

「……………殺す」

「へっ?」

悠はそう言い残して歩いていった。

## 回想終わり

「と、言う事があった」

椿が淡々と言った。

「んじゃ悠に前衛やつてもらおう」

悠の怒りに巻き込まれるのはゴメンだと、文弥が聞こえないように付け足す。

「友達想いだね」

鏡花がゆる〜く締めくくる。

「決まったみたいだな」

すつきりした顔の美紀が近付いてきて言った。尊い犠牲のもとに危険は去ったのだろう。

「おう。じゃあ、行くか」

達哉が歩き出し、みながそれに続いた。

「ねえ、はぐちゃんはどつするの？」

鏡花が美紀に聞くと

「紐でもくくり着けて引つ張ってけばいいじゃない」

「あはは…」

もはや笑うしかなかった。

## 決勝戦

広いドーム状の模擬戦ホールで達哉たち7人と流生率いる10人が向かい合っていた。緊張感がひしひしと伝わってくる。

審判役の教師が台に上り…

『レディー・ゴー!!』

大声と共に開始のブザーがなる。

「うおっしゃー、いくぞイカサマ野郎ども！」

「…やっぱ殺す」

こうして決勝戦は始まった。

みんなあー、いきなりの展開に押し流されてしまいそうだからあー、ちょー簡単な説明をしておきますねえー

え？お前は誰かって？それはまだまだ秘密ですっ！

コホンッ、私の事はベルちゃんと呼んで下さいねー　ベルたんでも、ベルたまでも、お好きな用に呼んで下さいーい

え？お前なんか興味ないからバトル見せろって？とつとと失せろって？やだなーブチコロシマスヨ

…うん静かになったね

おつといけない説明説明つと

今皆が見たがっているのは大日本マジックスクール伝統行事、『統一祭』って言うんですよ 春夏秋冬、年に4回のバトルリーグですマジックスクールって言うのは、『魔法使い』を作る学校で、統一祭がその頂点を決めるトーナメントって感じです 説明はこんなもんかな？それじゃ、バーイ

今日の達哉たちはいつもと違っていた。何が違うかと言われたら全体的に違っていた。

いつもなら互いをフオー出来るようにするのだが…。

「殺す殺すコロスコロスコロスコロス」

悠が恐かった。

「な、なあ悠やばくないか？」

文弥がちよつと引き気味に訪ねる。

「うゝん、出来るだけフオーするしかないねゝ」

「ったくあの馬鹿」

鏡花と美紀もあきれ気味だ。

フオーメーションもいつもと違い前衛が悠一人、あと全員が後衛になっている。6人の前では悠がバーサーカーのごとく戦っている。

「た、助けてえゝ！！」

「ヒイイ、来るなアゝ！！」……………。

6人は心の中で『御愁傷様』と手を合わせた。

『優勝は達哉グループです！』

## 文弥の部屋

場所が変わって文弥の部屋。マジックスクールの生徒は全員寮生活している。

大抵みんなが集まる時は、文弥の部屋に行く。家具は少ないが決して寂しい感はなく、少ない分広いのだ。まあ、7人入れば手狭になっってしまうが。

「いやー、今回も楽勝だったな」

「ストレスは発散できたか？」

「ああ、ばっちりだ」

「怪我なくて良かったよね」

「怪我したらお前が治してくれるんだろ？」

「あいつの火は弱すぎる」

「えー強いんじゃない」

文弥、美紀、悠、鏡花、達哉、椿、隼斗の順で言う。一緒にいても必ず同じ話題で話す訳ではない。

「次のトーナメントもらくしよ……」

そこで文弥の声が途切れた。

ウーウーウーウーウー赤いランプと非常警報が鳴り響く。

「非常警報……！ モンスターか!？」

「くそつ。とりあえずロビーに行くぞ!!」

美紀に促されて皆部屋から走り出た。

## 寮のロビー

ロビーは混乱した生徒で一杯になっていた。それも当たり前だろう。非常警報には3つの種類があり、

青色…街にモンスター出現黄色…学校周辺に出現

赤色…学校内に出現

と、なる。

赤いランプとはつまり、学校内、および寮内にモンスターが出現したことを示す。

達哉たちはロビーにある大型モニターに目を向ける。

『警戒レベル、レッド。』

侵入モンスターは2体

見つけた者はモンスターを討伐するように』

とだけ、記されていた。

「くっそ。投げやりだな教師ども！」

椿が毒づく。

「そんなこといいから早くいくぞ！」

美紀が喝を入れて、皆走り出す。



## 現実・上（後書き）

ゲームは次からです。  
待って下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8750y/>

---

ブルー・アイリス

2011年11月26日19時51分発行